

## 研究報告

### 看護学生の共感性を高めるための教育介入研究の文献レビュー

茂木 英美子

足利大学 看護学部

#### 要旨

**【目的】** 看護学生の共感性を高めることを目的とした教育介入研究とその成果を、文献より明らかにすることを目的とした。

**【方法】** データベースは医学中央雑誌 Web 版を用い、「共感」「看護教育」を検索キーワードとした。研究目的に則した論文から、教育介入内容とその主な成果を抽出し、それらの内容について検討した。

**【結果】** 13 論文を分析対象とした。共感性を高めることを目的とした教育介入研究は少なく、その内容は自他分離の促しと疑似体験学習が中心であった。これらは視点取得の助けとなっていると考えられ、成果として患者の置かれた状況の理解や適切なケア行動の実施に繋がっていた。

**【結論】** 看護学生の共感性を高めることを目的とした教育介入研究の内容は、疑似体験学習が中心であった。一方で、疑似体験学習に抛らず、患者の気持ちの理解を促す教育の必要性が考えられた。今後、学生がどのように患者の気持ちを理解したのか、認知過程を掘り下げて考えられるような教育研究が必要であると考えられた。

キーワード：教育介入研究，共感，疑似体験学習，認知過程

## 1. 研究背景

共感は看護における基本的な態度及び技術とみなされている。これまでに共感について先達者たちが述べていると思われる箇所を引用すると、ナイチンゲールは「自らは感じたことのない他人の感情の中に身を投じる能力」と述べ<sup>1)</sup>、メイヤロフは「自分以外の人格をケアするには、私はその人とその人の世界を、まるで自分がその人になったように理解できなければならない。(中略)相手の世界で相手の気持ちになることができない」と述べている<sup>2)</sup>。これらは看護師が相手の立場に立って相手の思考や感情を十分にくみ取り、その上でケアすることの必要性を意味している。また、看護学では「患者の立場に立つ」という言葉がよく聞かれるが、患者の立場に身を置くという認知的操作は他者の気持ちを理解するという意味で共感との関連が深いと考えられる。薄井と三瓶は立場を変換できる能力を磨く方法として、観念的な追体験を、質を保ちながら繰り返し、それによって現象の意味を捉えることを強調している<sup>3)</sup>。これらより、共感とは看護の基本として位置づけられる概念でありながら、その理解と実践は容易なことではなく、看護師にとって生涯磨き続けられなければならない能力であると言える。

共感性を測る尺度は心理学分野で開発されている。看護学でもそれらの尺度が用いられ、看護師の共感性と看護介入の関連性<sup>4)</sup>や、臨地実習前後での看護学生の共感性の変化等<sup>5,6)</sup>、看護師及び看護学生の共感性に関する研究報告が多数ある。しかし個々の事例レベルで考えれば、看護師が自己の共感能力を評価する場合、尺度の活用だけでなく自己の思考過程や実践、そしてそれに対する患者の反応を十分に検討する必要があるのではないだろうか。この作業を続けることによって共感性が向上するのではないだろうか。

望月と高木<sup>7,8)</sup>は、看護学における共感概念は定まっておらず、それに伴い定義もいくつかのパターンがあることを報告している。未だ確立されていない共感という概念について、看護学初学者の学生に対してどのように教育していくべきだろうか。共感が生涯研鑽を要する能力であるなら

ば、看護師となって事例を振り返る際にも教育機関での基礎教育が重要であると考えられる。また、発達学的には看護学生は青年期に該当する場合が多い。青年期の発達課題はアイデンティティの確立と言われており、そのためには他者との相互作用が欠かせない。看護学生が他者に共感する能力を養っていくことは、看護師になるための一つの修練であることはもちろん、発達課題を克服していく観点からも意義があると考えられる。

看護学生に対する共感性を高めることを目的とした現状の教育介入研究を検討することは、今後の教育資料として有用であると考えた。

## 2. 研究目的

看護学生に対し共感性を高めることを目的とした教育介入研究とその成果を文献から明らかにする。

## 3. 研究方法

教育研究として掲載された看護論文から、共感の定義、看護学生を対象に行った共感性を高めることを目的とした教育介入の内容、その主な成果を抽出した。抽出後それらの内容について検討した。

データベースとして、医学中央雑誌Web版とメディカルオンラインを使用した。医学中央雑誌の検索式は〈共感/TH and 看護教育/TH〉とし、近年のデータを分析するために2007年から2017年に発表された原著論文を検索した。メディカルオンラインにおいては、共感AND看護をキーワードとし、2007年から2017年の期間で検索した。

## 4. 結果

データベースの論文検索日は2017年10月31日である。研究方法に記載した検索にて、医学中央雑誌より96件の結果を得た。この内、本研究目的に合致すると考えられたのは4文献であった。内訳としては、精神看護学実習担当の教員を対象とした共感を育成する指導に関する報告が1件、身体拘束・オストメイト・高齢者疑似体験を行った報告が1件ずつである(表1)。メディカルオンラインでの検索結果は15件であり、本

研究目的に合致すると考えられた論文は0件だった。

対象論文数が非常に少なかったため、医学中央雑誌で検索された残りの92件の論文のうち、共感性を高めることを主の目的としていない論文であっても、結果的に看護学生が共感の学びを得られたことを示した論文も調査した(表2)。

表1から、次のことが言える。小西は<sup>9)</sup>、教員は学生に対して自己と患者を概念的に分離し、患者の視点をもって日常生活の援助ができるよう指導していた。また、患者の気持ちの共有を促していた。これらの指導により学生は患者への援助行動がとれていた。

佐藤ら<sup>10)</sup>、田中ら<sup>11)</sup>、藤野ら<sup>12)</sup>は、共感性を高めることを目的として疑似体験学習を行っていた。その成果として、患者の気持ちの想像ができ、尺度上で成果が示されたり援助行動に結びつい

たりしたと報告されていた。

表2から、次のことが言える。事例検討・学生同士によるロールプレイング・模擬患者を導入してのロールプレイング・視聴覚教材活用・文学作品活用・学生の体験の教材化を行うことによる講義・演習の結果の一部として、学生は共感についての学びを得ていた。具体的には、相手の立場で考えること(富田ら<sup>13)</sup>、中澤ら<sup>14)</sup>、菅沼ら<sup>15)</sup>)、自己理解(中澤ら<sup>14)</sup>)、相手への関心(中澤ら<sup>14)</sup>、菅沼ら<sup>15)</sup>)、共感の意義(富田ら<sup>13)</sup>、富田ら<sup>16)</sup>、葛原ら<sup>17)</sup>)、他者の気持ちの想起(実藤ら<sup>18)</sup>、石川ら<sup>19)</sup>、岩月ら<sup>20)</sup>、鶴生川<sup>21)</sup>)などを学べていた。

## 5. 考察

小西の報告では<sup>9)</sup>、教員は学生に対し自他の分離を促している。その結果、学生に患者や疾患に対して「決めつけ」があったことへの気づきを

表1 看護学生の共感性を高めることを目的とした論文の概要

著者 論文タイトル	共感の定義	共感性を高めることを目的とした 主な教育研究内容	主な成果
小西利奈 <sup>9)</sup> 精神看護学実習における看護学生の援助行動に結びつく共感を育成する指導の実態	自己分離がなされた上で他者の感情の理解を含めて他者の感情を共有すること	精神看護学実習担当教員を対象に指導内容のインタビュー調査を実施。以下は主な指導内容。 ・患者の状況に視点を置くことを重視した指導 ・患者の現実を学生自身と切り離して吟味することの促し ・患者の気持ちの共有の促し	学生が患者や疾患に対して有していた「決めつけ」があったことへの気づきを促せ、患者の状況を客観的に捉えることができていた。それによって患者の孤独を理解し、最終的には患者に適したケアの実践に至った。
佐藤美保, 他 <sup>10)</sup> 行動制限の体験学習を通じた学生の学び—制限を受ける患者への共感を目指して—	定義の記述なし	隔離・拘束についての講義と演習を行った。演習時、希望者のみに身体拘束の体験してもらった。講義・演習後アンケート調査を行い、記載内容を分析した。	学生は、理不尽さや苦痛、恐怖心などの気持ちを想像し、その上で身体拘束時の看護について考えられた。
田中恵子, 他 <sup>11)</sup> 体験学習をした看護学生の患者に対する共感的言動—ストーマ装具を貼用してのオストメイトの疑似体験を通して	共感：相手の立場に自分を置き、自分と異なる存在としての相手に対する理解  共感的言動：相手に対して理解したことを示す言葉や行動	オストメイトの疑似体験した学生を実験群、体験していない学生を対象群として模擬患者へのケアの相違を観察した。	対照群に対し実験群のほうで共感的言動が多く見られた。具体例は、患者が苦痛を訴えやすい声かけを行う、苦痛緩和の具体的援助を行う等である。
藤野あゆみ, 他 <sup>12)</sup> 高齢者疑似体験前後における学生の共感性の変化	尺度の共感の定義：他者の体験する感情を見た側に、それと一致した、あるいはそれに対応した感情的反応が起こること	高齢者疑似体験学習および片麻痺の高齢者疑似体験前後での共感性の変化を調査した。調査には青年期用多次元的共感性尺度 <sup>25)</sup> を使用した。	下位尺度「気持ちの想像」において体験実習前と比較し体験実習後の平均値が有意に高かった。

表2 看護学生が共感の学びを得られた論文の概要

著者 論文タイトル	教育研究内容	共感に関する学生の学び
富田幸江, 他 <sup>13)</sup> 看護学生が基本的なコミュニケーション技法のロールプレイを通じて得た人間関係に関する気づき	学生自身の悩みなどについて, 学生同士で患者役・看護師役のロールプレイを行い, 学生が得た人間関係に関する気づきをまとめた。	共感や相手の立場に立つことで, 相手との関係性の構築ができることを学んでいた。
中澤明美, 他 <sup>14)</sup> ヒューマンケアの心を育む「看護コミュニケーション演習」の試み-課題レポート分析にみる学生の獲得-第1報	看護コミュニケーション演習として事例検討・ロールプレイを行い, その後, 自己理解や他者との関係性について学んだことを課題レポートにまとめてもらい, その内容を分析した。	自己理解の促進や, 肯定的自己受容, 他者の個性を認めて関心を寄せること, 思いやることを学んでいた。
菅沼澄江, 他 <sup>15)</sup> ヒューマンケアの心を育む「看護コミュニケーション演習」の試み-課題レポート分析にみる学生の獲得-第2報	看護コミュニケーション演習として事例検討・ロールプレイを行い, その後, 自己理解や他者との関係性について学んだことを課題レポートにまとめてもらい, その内容を分析した。	相手への関心を持つ努力が必要, 考えの幅を広げていくことが大切, 相手の立場で考える努力が必要である, 等を学んでいた。
富田幸江, 他 <sup>16)</sup> 看護学生の「共感」の意味の捉え方 援助的関係形成のあり方を学ぶ学内演習からの分析	看護方法演習内で, ロールプレイを行った。演習後に, 患者にとって看護師が共感することの意味についてレポート提出してもらい, その内容を分析した。	共感が患者の不安の軽減や患者理解に繋がることを学び, 援助的関係プロセスが成立していく上で必要な要素として捉えている。
葛原誠太, 他 <sup>17)</sup> 老年看護学演習における視聴覚教材活用の効果	模擬患者と学生のコミュニケーション場面の動画を作成し, eラーニングで視聴してもらった。動画に関するレポート内容を分析した。	動画の中の学生の対応から, 共感的理解を示すことが対象の気持ちの理解に繋がることを学んでいた。
実藤基子, 他 <sup>18)</sup> 模擬患者参加による看護過程の情報収集における学び	看護過程の演習に模擬患者を導入した。演習終了後, 学習達成度を自作の評価表を用いて評価してもらった。	患者の不安や苦痛を知覚し, 気遣いを示す言葉がけや配慮が行えた。
石川美智, 他 <sup>19)</sup> 身近な人との死別体験を教材とした死生観教育展開後の学生の思い	身近な人との死別体験を有する学生の体験を教材とし, 少人数でディスカッションを行った。その後感想を記載してもらい, その内容を分析した。	自分の体験と重ね合わせることで共感したり, 友人の悲しみを感じたりした。身近な存在である友人の死別体験を教材とすることで, 学生はよりリアリティを感じ, 共感の育成に繋がった。
岩月すみ江, 他 <sup>20)</sup> 急性期看護の理解を深めるためのナラティブ教材を用いた教授法の検討	急性期看護の講義前後で課題図書(ALS患者の家族の手記)を読んでもらい, 気になった点・印象に残った点についてのレポートを講義の前後で提出してもらい, その内容を分析した。	ADLが制限されていくストレス, 予後への不安, 介護者に対する申し訳なさ等, 患者の思いを推測していた。
鶴生川恵美子 <sup>21)</sup> 医療系学生の共感を高める文学教材の可能性-学生による自由記述の内容分析に基づいて-	医療に関連する文学作品を英語の講義で用い, 講義を通して得られた学生の自己変化を質的にまとめた。	他者の気持ちを理解する重要性や, 患者や家族への心理的サポートの重要性を学んでいた。また, 死にゆく患者の苦しみや悲しみを感じた内容が得られていた。



促せ、患者の状況を客観的に捉えた上で患者の孤独を理解し、最終的には患者に適したケアの実践に至ったとある。角田は共感を「能動的また想像的に他者の立場に自分を置くことで、自分とは異なる存在である他者の感情を体験すること」と定義しており<sup>22)</sup>、共感において自己と他者が明確に区別されていることの重要性を述べている。林は<sup>23)</sup>「患者の立場に立つ」ことについての看護師の思考過程を考える上で、社会心理学で使用されている視点取得という概念を用いている。視点取得とは対象を他者の視点から見たときにどのように見えるかが理解されるようになることであり、他者の認知や感情の内容を理解するという意味でも用いられる<sup>24)</sup>。「相手の立場に立つ」ことは、自己と他者が区別されていることが前提で行える心理的所作であり、共感の始まる一つの過程と言える。さらに、視点取得を考える上での前提条件でもある。教員が学生に自他の分離を促したことは、共感性を高めるために重要な指導であると考えられる。

また、表1より、現状において共感性を高めることを目的とする教育介入研究は疑似体験学習が中心ということになる。佐藤らは<sup>10)</sup>、精神看護学の講義及び演習の一環として希望者のみに身体の一部のみの抑制帯装着を体験してもらい、講義後のアンケート調査内容を分析した。その結果、学生は患者の苦痛や恐怖心などの気持ちを想像し、その上で人権を重んじることや心理的配慮の重要性を学んでいた。田中らは<sup>11)</sup>、ストーマ装具を貼付したオストメイト疑似体験をした学生を実験群、疑似体験していない学生を対照群として模擬患者へのケアの相違を調査した。実験群では患者が苦痛を訴えやすい声かけや苦痛緩和の具体的援助行為が見られ、対照群に比べて共感的言動が多いことが示されていた。いずれも学生は疑似体験によって患者の置かれた状況を想像することができ、そこから精神看護の学びを深めたり、オストメイトのケア行動に繋がったりすることができていた。藤野らは<sup>12)</sup>、加齢による身体的変化を体験できる教材と片麻痺の疑似体験ができる教材を使用し、体験学習前後での共感性の変化を登張の開発した尺度を用い

て調査した<sup>25)</sup>。その結果、下位尺度である「気持ちの想像」において、疑似体験学習後に有意な得点上昇が見られたと報告した。「気持ちの想像」を構成する質問項目は、「誰かに対し腹が立ったら、しばらくその人の立場に立ってみようとする」等、他者の視点取得を問う内容である。つまり、疑似体験学習は学生が他者の視点を取得することを助け、それによって共感性を高める助けとなる学習方法といえる。佐藤ら<sup>10)</sup>、田中ら<sup>11)</sup>の報告も、学生にとって疑似体験が患者の視点取得を易しくし、患者の置かれた状況の想像を助けたと考えられる。

一方で、共感性を高めることを目的とする疑似体験学習の限界として、疑似体験できる患者状況は限られることが挙げられるだろう。表1に示された疑似体験学習は教材として販売されていたり装具が手に入れやすかったり等、比較的体験が容易であるが、様々な疾患によって生じている症状やそれによる日常生活への支障はほとんど疑似体験が困難である。看護師には疑似体験の有無に関わらず、患者の気持ちを理解する能力が求められているはずである。

以上より、看護学生の共感性を高めることを目的とした教育では入手可能な教材を取り入れる一方で、疑似体験ができなくとも学生に患者の気持ちの理解を促せるような教育が必要と言える。これに関する具体例を考える際に、表2に示された教育内容が役立つと考えられる。表2ではコミュニケーション方法や看護過程の演習内容として事例検討やロールプレイングがあり、その成果の一部として学生が共感について学べていることが示されている。ただし、学生が実際に相手の発言や言動に対してどのような認知過程を経て気持ちを理解したのか、その詳細の記述は少なかった。

近年、心理学における共感の定義は、他者の心理状態を理解する認知的定義と他者の心理状態に対する代理的な情動反応を強調する情動的定義を統合し、多次元の構造として捉えられている<sup>26)</sup>。一方で籠らは<sup>27)</sup>、入職2年目の看護師を対象とし、看護師の共感の理解の特徴について質問紙調査を行っている。調査の中で、共感が

患者の置かれた状況を理解する認知的共感であるか、患者と同じ感情を自分自身も抱く感情的共感であるか、どの程度看護師の考えが当てはまるのかを5段階法で尋ねて得点化した。その結果、有意差は見られなかったものの、認知的共感の平均値の方が感情的共感の平均値よりも高値を示し、看護師にとって共感 は情動反応よりも認知面が重視されている傾向にあることを報告した。また、望月<sup>7)</sup>、看護研究における共感概念についての文献検討を行い、共感が「相互理解のプロセス」として捉えられていることを報告している。これらより看護における共感では患者を理解する認知的側面が重視される傾向があると言える。林は<sup>28)</sup>、看護学生を対象とした質問紙法にて「患者の立場に立つ」思考について検討している。この報告の中で「もし私が患者の立場だったら」と考えることは患者の立場に立つことか否か、について学生の認識を調査し、その考え方を肯定する学生は自己の思考を中心に考えやすいために、患者の置かれた状況を客観視することが困難になる可能性を考察している。看護において共感の認知面を重視するなら、自分がどのように他者の気持ちを理解したのかについて自己の認知過程を丁寧に掘り下げることは、他者への共感に到る自己の思考の特徴を知る助けとなるだろう。また、自己の認知過程を把握するためのツールの一つとして、プロセスレコードがある。ウィーデンバックは、看護事例の再構成が思考過程の諸要素の分類に役立つ<sup>29)</sup>とし、その方法は現在プロセスレコードとして患者-看護師関係を学ぶ看護教育に活用されている。具体的には、看護場面での看護師(看護学生)の知覚、考えや感情、実際の行為を記述していくものである。プロセスレコードの活用も学生の共感性を高めていく視点から意義があると考えられた。

本研究では、看護学生の共感性を高めるためにどのような教育が行われているのかについて文献レビューを行った。疑似体験学習や事例検討、ロールプレイングなどを通して看護学生が共感を学んでいることが明らかになった。一方で、看護学生や看護師が共感の困難さに直面しているという報告もある<sup>27,30,31)</sup>。緒言でも述べたように他者

への共感 は容易ではない。看護学生の共感への学びを深めるためにも、今後、教員から学生に対する問いかけの仕方には一考の余地があると考える。表1、表2より、学生の共感に関する学びは、多くがレポート内容の分析によって報告されている。レポートは「どんなことを学んだか」等、学べたことを問うのが一般的である。そもそも「学べなかったこと」を認知することは困難であるし、もし認知されていたとしてもレポートには書きにくいという学生の心理が働く可能性がある。よって、今後、学生への問いかけの仕方の工夫とレポート内容分析以外の研究方法でのデータ蓄積が望まれると考えられた。また、前述した通り本研究で得られた論文では学生が他者とのやり取りにおいて、相手の思いをどう捉え、それに対してどういう思考のもとでどう対応したのか等、自己の認知過程を深く掘り下げる作業はされていない。自己の認知過程について考えることで学生の学びは広がりを持ち、その過程において共感の困難さや新たな気づきが得られる可能性もある。これは、看護師になった後の共感の困難感への備えや対処としても意味を持つと考えられる。

## 6. 結論

看護学生の共感性を高めることを目的とした教育介入研究は、自他分離の促しと疑似体験学習による成果報告が中心であった。これらの教育は看護学生にとって患者の視点取得を助けていたと考えられ、成果として患者の置かれた状況の理解や適切なケア行動の実施に繋がっていた。一方、学生が実際に相手の発言や言動に対してどのような認知過程を経て気持ちを理解したのか、その詳細の記述は少なかった。今後、疑似体験学習以外にも事例検討やロールプレイングなどを用いたりプロセスレコードを活用したりして学生がどのように他者の気持ちを理解したのか、自己の認知過程を掘り下げて考えられるような教育の必要性が考えられた。

## 7. 研究の限界と今後の課題

本研究の限界は一つのデータベースのみの検索結果を基にしていることが挙げられる。今後の

課題としては、国外も含め複数のデータベースを活用することである。また、本研究では教育介入内容とその成果に注目したが、分析をより深めるためにも、教育介入が行われた講義・演習・実習の位置づけや、対象となった学生の属性、評価指標についても詳しく検討していく必要がある。

## 引用文献

- 1) ナイチンゲール, F. /小林章夫, 竹内喜訳. 看護覚え書き. うぶすな書院; 1995. 136.
- 2) メイヤロフ, M. /田村真, 向野宜之訳. ケアの本質 生きることの意味: ゆるみ出版; 1987. 93.
- 3) 薄井坦子, 三瓶眞貴子. 看護の心を科学する 解説・科学的看護論: 日本看護協会出版会; 2004. 118.
- 4) 中島真由美, 西田直子. 内科, 整形外科患者の慢性疼痛に対する看護介入と看護師の共感性との関連. 日本看護技術学会誌. 2015; 14: 78-85.
- 5) 松尾綾, 前田由紀子. 臨床実習における看護学生の共感性, 道徳的感性, 自尊感情に関する研究. 西南女学院大学紀要. 2017; 21: 27-37.
- 6) 山本照恵. 看護学生の臨地実習におけるケアリングに関する研究 実習前後の共有経験尺度得点の変化に焦点を当てて. 神奈川県立保健福祉大学実践教育センター看護教育研究集録. 2010; 35: 84-91
- 7) 望月由紀. 日本の看護研究における共感概念についての検討. 千葉大学看護学部紀要. 2007; 29: 1-8.
- 8) 高木佳子. 看護基礎教育における「共感」の定義についての検討. 神奈川県立保健福祉大学実践教育センター看護教育研究収録. 2012; 37: 78-85.
- 9) 小西利奈. 精神看護学実習における看護学生の援助行動に結びつく共感を育成する指導の実態. 日本精神保健看護学会誌. 2017; 26(1): 1-9.
- 10) 佐藤美保, 田野将尊, 浅沼奈美. 行動制限の体験学習を通じた学生の学び 制限を受ける患者への共感を目指して. 杏林大学研究報告(教養部門). 2016; 33: 9-19.
- 11) 田中恵子, 野村志保子, 森本紀巳子. 体験学習をした看護学生の患者に対する共感的言動 ストーマ装具を貼用してのオストメイトの疑似体験を通して. 日本看護学教育学会誌. 2012; 21(3): 25-35.
- 12) 藤野あゆみ, 百瀬由美子, 松岡広子, 他. 高齢者疑似体験前後における学生の共感性の変化. 日本看護福祉学会誌. 2009; 14(2): 135-147.
- 13) 富田幸江, 天野雅美. 看護学生が基本的なコミュニケーション技法のロールプレイを通じて得た人間関係に関する気づき. 埼玉医科大学看護学紀要. 2008; 1(1): 65-71.
- 14) 中澤明美, 菅沼澄江, 西田陽子, 他. ヒューマンケアの心を育む「看護コミュニケーション演習」の試みー課題レポート分析にみる学生の獲得ー第1報. 東都医療大学紀要. 2011; 1(1): 7-14.
- 15) 菅沼澄江, 西田陽子, 中澤明美. ヒューマンケアの心を育む「看護コミュニケーション演習」の試みー課題レポート分析にみる学生の獲得ー第2報. 東都医療大学紀要. 2012; 2(1): 34-40.
- 16) 富田幸江, 大堀昇, 石津みゑ子. 看護学生の「共感」の意味の捉え方ー援助的関係形成のあり方を学ぶ学内演習からの分析ー. 埼玉医科大学看護学紀要. 2012; 5(1): 31-38.
- 17) 葛原誠太, 室屋和子, 野元由美. 老年看護学演習における視聴覚教材活用の効果. 産業医科大学雑誌. 2013; 35(2): 173-182.
- 18) 実藤基子, 堂本司. 模擬患者参加による看護過程の情報収集における学び. 看護・保健科学研究誌. 2015; 16(1): 75-82.
- 19) 石川美智, 山本真弓. 身近な人との死別体験を教材とした死生観教育展開後の学生の思い. ホスピスケアと在宅ケア. 2015; 23(3): 350-356.
- 20) 岩月すみ江, 小野善昭, 相馬幸恵. 急性期看護の理解を深めるためのナラティブ教材を



- 用いた教授法の検討. 札幌保健医療大学紀要. 2016;2:13-25.
- 21) 鶴生川恵美子. 医療系学生の共感を高める文学教材の可能性—学生による自由記述の内容分析に基づいて. 群馬県立県民健康科学大学紀要. 2017;12:33-43.
  - 22) 角田豊. 共感経験尺度改訂版 (EESR) の作成と共感性の類型化の試み. 教育心理学研究. 1994;42(2):193-200.
  - 23) 林智子. 看護師はどのように患者の立場に立って考えているのか. 三重看護学誌. 2011;13:93-101.
  - 24) 竹内謙彰. 心理学事典. 中島義明, 安藤清志, 子安増生ら編集. 有斐閣;1999. 353-354.
  - 25) 登張真穂. 青年期の共感性の発達—多次元的視点による検討. 発達心理学研究. 2003;14(2):136-148.
  - 26) 鈴木有美, 木野和代. 多次元共感性尺度 (MES) の作成—自己指向・他者指向の弁別に焦点を当てて—. 教育心理学研究. 2008;56:487-497.
  - 27) 籠玲子, 太田勝正. 新人看護師の共感の理解の特徴と患者に共感的態度で接することに困難を感じた経験について. 看護科学研究. 2012;10:37-46.
  - 28) 林智子. 場面想定法を用いた「患者の立場に立つ」思考内容の検討—看護学生を対象とした調査から—. 群馬保健学紀要. 2006;27:33-41
  - 29) アーネステイン・ウィーデンバック. /外口玉子, 池田明子訳. 臨床看護の本質—患者援助の技術:現代社;1969. 111.
  - 30) 茂木英美子. 患者との関わりにおいて否定的感情が生じた看護師の思考. 日本保健医療行動科学雑誌. 2013;28(1):50-59.
  - 31) 日高優. 看護学生における共感性の検討—看護大学2校の看護学生に対する共感性の調査から—. 日本看護科学会誌. 2016;36:198-203.



## Literature review of the educational intervention studies to enhance empathy for nursing students

---

Emiko Motegi

Department of Nursing, Ashikaga University

### *Abstract*

**【Purpose】** This study aims to elucidate the results of the educational intervention studies designed to enhance empathy for nursing students using the existing literature.

**【Methods】** The online database of the Japan Medical Abstracts Society was searched for the following keywords: “empathy” and “nursing education”. The literature in accordance with the research purposes was reviewed. Furthermore, the contents of the educational intervention studies were extracted and the major research outcomes from them were reviewed.

**【Results】** Thirteen studies were selected for analysis. There were few educational intervention studies designed to enhance empathy. The contents were focused on simulation learning experiences in addition to the promotion of self-other separation. These seemed to develop nurses’ perspective-taking skills and, as a result, led to the understanding of a patient’s own situation and the implementation of proper care activities.

**【Conclusion】** The contents of the educational intervention studies designed to enhance empathy for nursing students were mostly simulation learning experiences. However, education to promote nursing students to read a patient’s mind without dependence on simulation learning experiences is necessary. Therefore, further educational studies to ponder over the cognitive process, namely, how nursing students read a patient’s mind, are needed.

**Key words :** educational intervention studies, empathy, simulation learning, cognitive process